

幼児の保護者へのお手伝い実践に関する食教育支援 による効果

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福井大学教育・人文社会系部門 公開日: 2025-04-02 キーワード (Ja): 幼児, 保護者, 偏食, お手伝い, 食環境 キーワード (En): 作成者: 村上, 亜由美, 志摩, 史子, 岸本, 三香子, Murakami, Ayumi, Shima, Fumiko, Kishimoto, Mikako メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/0002000465

幼児の保護者へのお手伝い実践に関する食教育支援による効果

村上 亜由美^{*1} 志摩 史子^{*2} 岸本 三香子^{*2}

(2024年12月1日 受付)

内容要約 幼稚園に通う3～5歳児166人の幼児とその保護者を対象に、お手伝い実践を推奨する食教育支援による効果を検討した。事前調査(64人、回収率38.6%)、年齢別のお手伝いの実践を推奨する「食育だより」や子どもと一緒に記入できる「お手伝いチェックシート」の配布、事後調査(51人、回収率30.7%)を実施した。その結果、保護者の食環境設定への意識は高くなった。週3回以上お手伝いを実践した幼児は、28.1%から41.2%に増加した。お手伝い実践群59.2%の幼児では非実践群40.8%より、嫌いな食べ物が食べられるようになった者が多く、その内容は豆・大豆製品、野菜類で顕著であった。食教育支援により、幼児の食事の食べ方を変化させ、野菜類嫌いを軽減させたことが示唆された。

キーワード：幼児、保護者、偏食、お手伝い、食環境

I 緒 言

子どもの食事で困っていることとして「偏食」を挙げている保護者は、平成27年度乳幼児栄養調査¹⁾において、3～4歳未満30.6%、4～5歳未満32.9%、5歳以上28.5%と報告されている。

子どもの食事及び食環境は保護者の食意識に影響を受ける。幼児期の健やかな発育のための栄養・食生活支援ガイド(確定版)²⁾において、子どもが苦手な食材とかかわる機会を作ることの重要性についての記載があり、生活の流れの中に食事があるという視点を取り入れることを提案している。淀川ら³⁾は、調理、食を介した会話、買い物、野菜栽培等について母親と共同して取り組んでいる度合いや頻度が高ければ、子どもの好き嫌いを低下させる影響を及ぼすことが示されたと報告している。

志澤ら⁴⁾は、間接的に子どもの食行動の問題に影響することには、養育者への直接的な育児支援者の存在と他者からの支援があり、また、養育者の負担軽減には、支援状況を把握しながら養

^{*1}福井大学教育・人文社会系部門教員養成領域

^{*2}武庫川女子大学食物栄養科学部食物栄養学科

育者の精神的負担の状態に合わせた支援が必要であることを報告している。

そこで本研究においては、保護者に精神的負担をあまりかけず、保護者の幼児への食教育を家庭外から支援するための方策として、年齢別のお手伝いの実践を推奨する「食育だより」や幼児と一緒に記入できる「お手伝いチェックシート」などを配布した。それら媒体により、子どもと保護者が一緒に行う食に関する時間を増やし、子どものお手伝い実践を推奨する食教育支援の効果を明らかにすることを目的とし、保護者の食環境設定への意識、子どもの食環境及び食べ物の好き嫌いの変化に及ぼす影響を調査した。

Ⅱ 方 法

1. 調査時期と調査対象

兵庫県西宮市のA幼稚園に通う3～5歳児166人の幼児とその保護者を対象とした。

事前調査は2022年8～9月（64人、回収率38.6％）、事後調査は2022年10～11月（51人、回収率30.7％）に実施した。

2. 調査対象の基本属性

事前調査での幼児の基本属性について、性別は男児24人（37.5％）、女児40人（62.5％）、年齢構成は年少17人（26.6％）、年中28人（43.8％）、年長19人（29.7％）であった。身長と体重（平均値±標準偏差）は、年少 $100.1 \pm 5.0\text{cm}$ と $15.9 \pm 1.8\text{kg}$ 、年中 $105.2 \pm 5.2\text{cm}$ と $17.3 \pm 1.8\text{kg}$ 、年長 $111.9 \pm 4.8\text{cm}$ と $19.1 \pm 2.3\text{kg}$ であった。カウプ指数の判定では、やせぎみ（14.4以下）は11人（17.2％）、普通（14.5～16.4）は53人（82.8％）であった。アレルギーの有無は、有する5人（7.8％）、有しない59人（92.2％）であった。

家族構成は、3人家族が14世帯（21.9％）、4人家族は38世帯（59.4％）、5人家族は11世帯（17.2％）、6人家族は1世帯（1.6％）、対象の幼児が第一子であるのは47人（73.4％）、第一子以外は17人（26.6％）であった。保護者の就業状況について、父親の63人（98.4％）は常勤であった。母親では、常勤18人（28.1％）、パートタイム15人（23.4％）、フリーランス2名（3.1％）、専業主婦28人（43.8％）、その他1人（1.6％）であった。

3. 保護者を対象とした食教育支援

幼児の保護者を対象とした食教育支援として、「偏食に関するリーフレット」を全1回、保護者へ向けた「食育だより」と幼児へ向けた「お手伝いチェックシート」を全3回配布した。

「偏食に関するリーフレット」では、偏食・好き嫌いとは、心の健康への影響、調理の工夫点、おすすめレシピ、好き嫌いをする子どもへの対応などを記載した。「食育だより」は9月号、10月号、11月号を作成し、9月号ではお手伝いのメリット、年齢別のお手伝いの例、10月号では調理のポイント、親子で一緒に作れるレシピ、お手伝いのポイント、11月号では親子で一緒に作れるレ

シビを記載した。お手伝いのメリットの具体的な内容は、親子のコミュニケーションになる、自立につながる、責任感がつく、自分で考える力がつく、自己肯定感を育む、五感が磨かれるなどであった。「お手伝いチェックシート」には、3～5歳の年齢ごとに合わせたお手伝いの例と、子どもと一緒に書き込むためのチェック表を記載した。具体的なお手伝いの内容は、混ぜる、野菜を洗う（3, 4, 5歳）、机を拭く、お皿を拭く（3歳児）、野菜をちぎる、お米を研ぐ（3, 4歳児）、お皿を洗う、卵を割る（4, 5歳）、包丁を使う、ご飯をよそう（5歳児）であった。

4. 保護者を対象としたアンケート調査

保護者に対する食教育支援の効果を検証するため、事前と事後にオンラインでのアンケート調査を行った。調査内容は、「食育だより」に関する項目、子どものお手伝いの変化に関する項目、嫌いな食べ物の変化に関する項目、子どもの様子に関する項目、保護者の食環境設定に関する項目とした。

5. 統計方法

アンケート調査結果の集計および統計処理には、Microsoft Office Excel 2019と統計計算ソフト IBM SPSS ver25.0 for Windows を使用し、お手伝い実践別による項目の比較には χ^2 検定を行った。

6. 倫理的配慮

武庫川女子大学の倫理委員会の承認（承認番号No. 22-56 令和4年7月16日）を得て研究を実施した。保護者への調査協力の依頼時には、回答は任意であること、取得した情報は幼稚園での保育や個人が特定されないよう統計処理をしたデータを研究発表に使うこと、情報は安全に管理されることなどを文書にて説明し、オンラインでの回答をもって同意とみなした。

Ⅲ 結 果

1. 食教育支援のための配付資料

図表には示していないが、配布した「食育だより」について「読んだ」33人（64.7%）、「少し読んだ」15人（29.4%）、「読んでいない」3人（5.9%）と、ほとんどの保護者が読んでいた。「食育だよりに記載したお手伝いを実践したか」は、「実践した」12人（23.5%）、「少し実践した」17人（33.3%）、「実践はしなかった」20人（39.2%）と、実践率は約57%であった。

2. 保護者からみた食教育支援による効果

保護者からみた食教育支援による効果を表1に示した。「家庭でのお手伝いの回数の変化」は、「増えた」22人（43.1%）、「変化なし」29人（56.9%）であった。「子どもが進んでお手伝いする

ようになった」は、「増えた」27人（52.9%）、「変化なし」24人（47.1%）と、お手伝いの実践については、半数近くの子どもの効果があったといえる。「保護者がお手伝いをするように声をかける回数の変化」は、「増えた」12人（23.5%）、「変化なし」37人（72.5%）、「減った」2人（3.9%）と、保護者の声掛けの変化における効果は限定的であった。「子どもの食べ物の好き嫌いの変化」は、「減った」4人（7.8%）、「変化なし」45人（88.2%）、「増えた」2人（3.9%）と、ほとんど効果がみられなかった。

表1 保護者からみた食教育支援による効果

項 目	n=51					
	増えた		変化なし		減った	
	n	%	n	%	n	%
家庭でのお手伝いの回数の変化はあったか	22	43.1	29	56.9	0	0.0
子どもが進んでお手伝いするようになったか	27	52.9	24	47.1	0	0.0
子どもがお手伝いの話をする回数の変化はあったか	25	49.0	26	51.0	0	0.0
保護者がお手伝いをするように声をかける回数に変化はあったか	12	23.5	37	72.5	2	3.9
子どもの食べ物の好き嫌いに変化はあったか	2	3.9	45	88.2	4	7.8

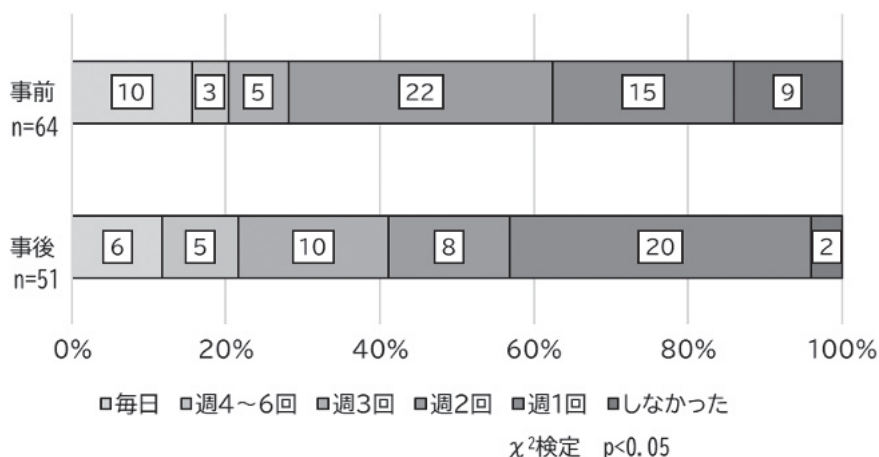


図1 食教育支援による子どものお手伝いの実践回数の変化

表2 お手伝いをした子どもが実践した内容

	事前 (n=55)	事後 (n=49)	内 容	事前 (n=55)	事後 (n=49)
かき混ぜる、ちぎる	61.8	61.2	その他	34.5	38.8
卵を割る	56.4	57.1	(内訳) 配膳	7.3	16.3
ご飯をよそう	18.2	57.1	食器を下げる	5.5	4.1
包丁を使う	27.3	36.7	野菜スライス	1.8	2.0
鍋に食材を入れる	36.4	34.7	胡麻を搗る	0	2.0
食器洗い	32.7	30.6	玉ねぎの皮をむく	0	2.0
お米を研ぐ	23.6	30.1	トマトのヘタをとる	0	2.0
野菜の皮むく	23.6	18.4	サラダスピナーを回す	0	2.0

(%、複数回答)

3. 食教育支援による子どものお手伝いの実践

食教育支援による子どものお手伝い実践回数の変化を図1に示した。週3回以上お手伝いをした子どもの人数と割合は、18人(28.1%)→21人(41.2%)(事前→事後、以後同様に表す)と増え、「しなかった」子どもの人数と割合は9人(14.1%)→2人(3.9%)と減った($p<0.05$)。

お手伝いをした子どもが実践した内容を表2に示した。事前、事後とも約60%程度と割合が高かったお手伝いの内容は、「かき混ぜる、ちぎる」、「卵を割る」であった。事後に割合が増えた

お手伝いの内容は「ご飯をよそう」18.2%→57.1%、「包丁を使う」27.3%→36.7%、「お米を研ぐ」23.6%→30.1%、「配膳」7.3%→16.3%であった。

4. お手伝いの実践別にみた子どもの様子の変化

「食育だよりに記載したお手伝いを実践したか」は、「実践した」「少し実践した」29人(56.8%)と「実践はしなかった」20人(39.2%)の2群に分けて分析した。

お手伝いの実践別にみた子どもの様子の変化を表3に示した。事前調査において、「食事を楽しみにしている」75.0%、「食べているとき楽しそうにしている」82.8%と、食事を楽しんでいる子どもの割合が高かった。

事前では「小食である」50.0%と半数の保護者は食べる量について気がかりであったが、事後での「食事が増えた」の回答は実践群では44.8%と非実践群の35.0%より、有意ではないが改善した割合が高かった。また、食に対する興味を持つようになった割合は、実践群では「料理をしたがるようになった」62.1%、「食材の名前や料理を知りたがるようになった」65.5%と、非実践群の55.0%と50.0%より有意でないがやや高かった。食事時の態度の改善や食べる速度について、事後での「変化なし」が約76%～90%とお手伝いの実践による変化はみられなかった。

表3 お手伝いの実践別にみた子どもの様子の変化

質 問 項 目	事前 ^{注1)} (n=64)	事 後 (n=49)							
		実践群 (n=29)				非実践群 (n=20)			
		あてはまる %	n	変化なし %	n	あてはまる %	n	変化なし %	n
食べることに興味を持つようになった	65.6	14	48.3	15	51.7	8	40.0	12	60.0
家での食事についておいしいなどの感想を言うようになった	73.4	16	55.2	13	44.8	11	55.0	9	45.0
料理をしたがるようになった	68.8	18	62.1	11	37.9	11	55.0	9	45.0
食事を楽しみにするようになった	75.0	16	55.2	13	44.8	13	65.0	7	35.0
食べているとき楽しそうにするようになった	82.8	16	55.2	13	44.8	9	45.0	11	55.0
食材の名前や料理を知りたがるようになった	73.4	19	65.5	10	34.5	10	50.0	10	50.0
食事の態度が改善した	—	5	17.2	24	82.8	4	20.0	16	80.0
おしゃべりが多く、なかなか進まない	76.6	—	—	—	—	—	—	—	—
じっと座ってられない、立ち歩く、気が散る	46.9	—	—	—	—	—	—	—	—
食べるのが遅くなった	62.5	5	17.2	24	82.8	3	15.0	17	85.0
食べるのが早くなった	15.6	7	24.1	22	75.9	2	10.0	18	90.0
食事が増えた	—	13	44.8	16	55.2	7	35.0	13	65.0
小食である	50.0	—	—	—	—	—	—	—	—

注1) 事前調査で「あてはまる」と回答している割合

 χ^2 検定 有意差なし

表4 お手伝いの実践別にみた保護者の食環境設定の変化

質 問 項 目	事前 ^{注1)} (n=64)	事 後 (n=49)								χ ² 検定
		実践群 (n=29)				非実践群 (n=20)				
		あてはまる		変化なし		あてはまる		変化なし		
		%	n	%	n	%	n	%	n	
食卓は子どもの心を育てる場だと考えるようになった	67.2	21	72.4	8	27.6	9	45.0	11	55.0	NS
食事時間を大切にしたいと考えるようになった	64.1	22	75.9	7	24.1	10	50.0	10	50.0	NS
家族で楽しく食事することは子どもにとって重要だと考えるようになった	89.1	22	75.9	7	24.1	12	60.0	8	40.0	NS
子どもと一緒に食事をするようになった	76.6	19	65.5	10	34.5	5	25.0	15	75.0	p<0.05
食事時あいさつするようになった	73.4	15	51.7	14	48.3	6	30.0	14	70.0	NS
家族全員が同じメニューを食べるようになった	78.1	15	51.7	14	48.3	3	15.0	17	85.0	p<0.05
家で食事についての会話をするようになった	65.6	14	48.3	15	51.7	4	20.0	16	80.0	NS
子どもと一緒に食料品の買い出しに行くようになった	75.0	14	48.3	15	51.7	4	20.0	16	80.0	NS
食事の時間はテレビを消すようになった	60.9	11	37.9	18	62.1	5	25.0	15	75.0	NS
主食、主菜、副菜のそろった食事を心がけるようになった	50.0	17	58.6	12	41.4	6	30.0	14	70.0	NS
食べ残しをしないように声掛けするようになった	87.5	15	51.7	14	48.3	5	25.0	15	75.0	NS
好き嫌いをしないように声掛けするようになった	79.7	14	48.3	15	51.7	4	20.0	16	80.0	NS
子どもの嫌いなものや苦手なものも食事に出すようになった	67.2	16	55.2	13	44.8	4	20.0	16	80.0	p<0.05
切り方や味付けなど調理法を工夫するようになった	62.5	11	37.9	18	62.1	4	20.0	16	80.0	NS

注1) 事前調査で「考えている」「している」と回答している割合

5. お手伝いの実践別にみた保護者の食環境設定の変化

お手伝いの実践別にみた保護者の食環境設定の変化を表4に示した。事前調査において、食環境設定の質問に「考えている」、「している」と回答している割合は、「主食、主菜、副菜のそろった食事を心がけるようにしている」のみ50.0%であったが、他の項目は約60%～90%と高かった。

また、事前調査で「考えている」と回答した割合が最も高かったのは「家族で楽しく食事をすることは子どもにとって重要だと考えている」89.1%であった。この項目については、事後調査においても「考えるようになった」に「あてはまる」と回答した割合が高く、実践群75.9%、非実践群60.0%であった。「食卓は子どもの心を育てる場だと考えるようになった」、「食事時間を大切にしたいと考えるようになった」の項目において「あてはまる」と回答した割合は、実践群で72.4%と75.9%、非実践群で45.0%と50.0%と他の項目より顕著に高い割合であった。その他の項目において、非実践群では、質問に「変化なし」と回答した割合が約70%～85%と高かった。

質問に「あてはまる」と回答した割合は、実践群と非実践群を比較すると「子どもと一緒に食事をするようになった」では65.5%と25.0%、「家族全員が同じメニューを食べるようになった」では51.7%と15.0%、「子どもの嫌いなものや苦手なものを食事に出すようになった」では55.2%と20.0%と有意に実践群で高かった。

6. 子どものお手伝いの実践による食べ物の好き嫌いの変化

子どもの食べ物の好き嫌いの変化について表5に示した。「食べ物の好き嫌いが多い」51.6%→52.9%、「食べられない種類が多い」32.8%→37.3%、「嫌いな食べ物はほとんど食べない」48.4%→54.9%、「嫌いな味付けの食べ物はほとんど食べない」62.5%→72.5%と割合はやや高くなった。反対に、「自分の好きな食べ物だけをよく食べている」59.4%→52.9%、「好きな味付けの物ばかりをよく食べる」65.6%→58.8%と割合は低くなった。

お手伝いの実践別にみた「嫌い」から変化した食品群を図2に示した。お手伝い実践群の幼児

表5 食べ物の好き嫌いの変化

内 容	事前 (n=64)	事後 (n=49)
食べ物の好き嫌いが多い	51.6	52.9
食べられない種類が多い	32.8	37.3
嫌いな食べ物はほとんど食べない	48.4	54.9
自分の好きな食べ物だけをよく食べている	59.4	52.9
嫌いな味付けの食べ物はほとんど食べない	62.5	72.5
好きな味付けの食べ物ばかりをよく食べる	65.6	58.8
		(%)

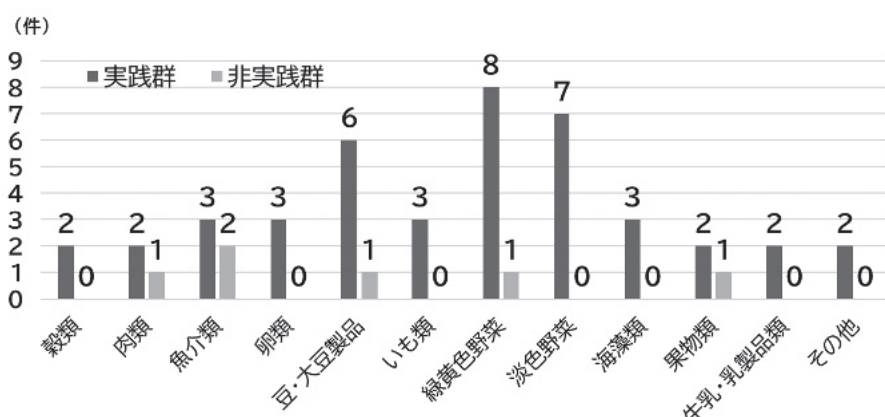


図2 お手伝いの実践別にみた「嫌い」から変化した食品群

ではすべての食品群で変化がみられ、特に、「豆・大豆製品」、「緑黄色野菜」「淡色野菜」で顕著であった。野菜に関する具体的な自由記述には、「ニンジンやキャベツなどを食べられるようになった」、「ネギが食べられるようになった」、「キャベツやレタスなどの葉物のサラダを食べられるようになった」、「ほうれん草が食べられるようになった」などがあった。

Ⅳ 考 察

幼児の保護者を対象とした食教育支援を実施したところ、保護者の約94%は配布した「食育だより」を読んでおり、記載したお手伝いの実践率は約57%と意欲的に食教育に取り組んでもらえたことがわかった。

年齢別には示していないが、子どものお手伝いの実践回数は事後には週3回以上の割合が約10%増え(図1)、5歳児でのお手伝いとして記載した「ご飯をよそう」は約30%増え、「包丁を使う」は約10%増えた。これは、5歳児でこれまで子どもがしていなかった、もしくは保護者がさせていなかった内容のお手伝いを実践してみたことにより、増えたのではないかと推察される。

「偏食」の定義は、最近の先行研究において一貫しておらず⁵⁾、偏食の定義は「食べ物の好き嫌いが激しいために、特定の食品に偏った食生活を送ること」とすること、あるいは「食べ物の好き嫌いと同義」とすることが多い、と指摘している⁶⁾。本研究では、配付資料には「偏食」と表現し、調査項目には「食べ物の好き嫌い」と表現して実施した。

保護者からみた食教育支援による効果として「子どもの好き嫌いに変化」について質問したところ「変化なし」との回答は88.2% (表2)であったが、好きな食べ物や味付けのものだけをよく食べる割合は減っている(表5)ことから、食べ方の様子で見ると変化があったといえる。

淀川³⁾は、調理、食を介した会話、買い物、野菜栽培等について母親と共同して取り組んでいる度合いや頻度が高ければ、子どもの好き嫌いを低下させる影響を及ぼすことが示されたと報

告している。お手伝いの実践により、すべての食品群において嫌いであったのが変化して食べるようになった人数は多くなり、「豆・大豆製品」、「緑黄色野菜」、「淡色野菜」での変化が顕著であった。深澤ら⁵⁾は、偏食低群の幼児は健康状態が良好であり、偏食高群は「野菜類（緑黄色野菜とその他の野菜）」、「その他の野菜」の摂取量が少ないことを報告している。つまり、野菜類は子どもの偏食や好き嫌いの多い食品であるが摂取量と健康状態に関連があったと報告しており、本研究の食教育支援において野菜類を食べるようになったことは、健康面においても子どもの望ましい変化として評価できる。

子どもの食事で困っていることに「食べるのに時間がかかる」には、3～4歳未満32.4%、4～5歳未満37.3%、5歳以上34.6%と、「偏食」と同程度かやや高い割合の保護者が挙げていた¹⁾が、食事中の態度の改善や食べる速度については、お手伝いの実践による効果はほとんどみられず（表3）、お手伝いの実践の推奨とは異なるアプローチが必要であることが示唆された。

幼児期の健やかな発育のための栄養・食生活支援ガイド（確定版）²⁾において、子どもが苦手な食材とかかわる機会を作ることの重要性について記載されている。支援ガイド事例として、「お手伝いを通じた食への興味・関心」とし、生活の流れの中に食事があるという視点を取り入れることを提案している。本研究での「家族全員が同じメニューを食べるようにする」や「子どもの嫌いなものや苦手なものを食事に出すようにする」などの保護者による食環境設定は、好き嫌いの減少に有効であると考えられるが、子どものお手伝いを実践することにより、保護者の意識も高くなることが示唆された。

2024年の報告書⁷⁾に設けられた質問である「食事が楽しく心地よい」に「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」の回答を合わせた割合は、幼児の保護者世代である男性20～29歳で64.1%、30～39歳で66.1%。女性20～29歳で77.6%、30～39歳で73.2%の結果であることから、「食事の楽しさ」は幼児の家庭においても重視され実行されている食環境設定であることが推察される。灰藤ら⁸⁾は、「食事の楽しさ」から「食欲旺盛」へはどの年齢でも強い関連があり、「食欲旺盛」から「野菜・海藻嗜好性」へは年齢が低いほど強く関連し、年少でその傾向が顕著であることを示唆したと報告している。

本調査における子どもの心に関する食環境設定の中でも、「家族で楽しく食事をする」とは最も高く、ほぼ90%が意識していた。「食卓は子どもの心を育てる場」、「食事時間を大切にしたい」については、子どものお手伝いの実践によって考えるようになった保護者が約75%になった。そして、「子どもと一緒に食事」もお手伝いの実践によって考えるようになっていたことから、子どもと一緒に食事の準備をする経験は、子どもと一緒に食事の重要性について保護者が考える機会になっていることが示唆された。

事前調査における保護者の食環境設定の意識の中でやや低かった項目は、「主食、主菜、副菜のそろった食事への心がけ」で50.0%であった。同年に実施された報告書⁹⁾の結果では、「主食・主菜・副菜を3つそろえて食べることが1日に2回以上ある」の質問に「ほぼ毎日」、「週に4～5日」

の回答を合わせた割合は、幼児の保護者世代である男性20～29歳で46.5%、30～39歳で52.9%。女性20～29歳で50.0%、30～39歳で53.7%であった。従って、本調査における保護者の「主食、主菜、副菜のそろった食事への心がけ」の意識の割合は、この報告書での「主食・主菜・副菜を3つそろえて食べている」割合とほぼ一致しているため、意識の低い集団というわけではなく、平均的な意識の高さであったと考えられる。主食・主菜・副菜をそろえることへの意識は、栄養のバランスをとり多様な食品群を摂取する観点からも、今後さらに高めるような働きかけが必要である。

本研究において、匿名性を担保するため個人を特定せず調査を実施したため、事前調査と事後調査について個人の変化を追うことはできなかった。食教育支援の効果がみられなかった子どもや保護者の特徴が明らかにできていれば、よりよい支援に繋げることができたと考えられる。

V 結 論

幼児の保護者を対象に、子どもの年齢別に示した具体的なお手伝いの内容や子どもと一緒に記入するチェックシートなどを配布する食教育支援によって、保護者の食環境設定意識が高くなり、幼児の食環境が良くなった。また、お手伝いの実践は幼児の食事の食べ方を変化させ、野菜類嫌いを軽減したことが示唆された。

謝 辞

本研究を進めるに当たり、調査にご協力いただきました幼稚園の先生方、保護者の皆様に感謝申し上げます。本調査は、武庫川女子大学食物栄養科学部食物栄養学科 応用栄養学研究室の学生と実施しました。感謝申し上げます。

利益相反

開示すべきCOI関係にある企業等はありません

文 献

- 1) 厚生労働省：平成27年度乳幼児栄養調査（2016）
- 2) 幼児期の健やかな発育のための栄養・食生活支援ガイド（確定版）令和4年3月
令和3年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）
「幼児期の健やかな発育のための栄養・食生活支援に向けた効果的な展開のための研究」（2022）
- 3) 淀川尚子、徳永淳也、丸谷美紀、波多野浩道：母子の食物新奇性恐怖と食生活コミュニケーションが野菜摂取におよぼす影響、民族衛生、82、183-202（2016）
- 4) 志澤美保、義村さや香、趙朔、十一元三、星野明子、桂敏樹：幼児期の子供の食行動と養育環境との関連、京都医大看護紀要、27、35～44（2017）
- 5) 深澤向日葵、吉井 瑛美、會退 友美、赤松 利恵、長谷川智子：幼児の偏食と健康状態および夕食の食品群別

- 摂取量、栄養素等摂取量、栄養学雑誌、79（6）、338～344（2021）
- 6) 當房 浩一、守田真里子、川上 育代、大柿 恵子、原田 香、秋吉 澄子、増淵千保美、坂田 敦子：幼児期における偏食の要因および食行動との関連の探索的研究 ―熊本県の保育施設・区役所における横断調査―、栄養学雑誌、82（3）、96～109（2024）
- 7) 農林水産省：食育に関する意識調査報告書（令和4年3月）（2022）
- 8) 灰藤友里子、山川佳那子、小瀬千晶、吉野世美子、米浪直子：偏食の観点からみた幼稚園児の食習慣に関するパス解析、日本家政学会誌、72、187～196（2021）
- 9) 農林水産省：食育に関する意識調査報告書（令和6年3月）（2024）

